

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター カトリック仙台司教区・カリタスペース

(宮古・大槌・釜石・障がい者センターかまいし・大船渡・米川・石巻・福島デスク・原町・もみの木・CTVC)

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

今年も師走の声を聞き、慌ただしさが増した感じがいたします。今回は、「福島の今」と題する講演を真剣に聞き、深く受け止めた高校生の感想と、カリタス釜石のパープルリボンの活動、子ども支援活動の一環として行っている Caritas Morning CAFÉ の様子をご紹介します。皆さま、どうぞ、よいクリスマスと新年をお迎えください。

京都暁星高校 講話感想

「福島の今」ー福島の実現 複雑化した現状をどう伝えるかー

京都府宮津市にある京都暁星高校は、震災後、継続的に高校生を釜石や大船渡ベースへ派遣しています。同校では、学校全体で毎年のように、国内外の社会問題に焦点をあて、テーマを決めて事前に学習し、問題を理解しようとして、かつ、自分たちの行動にするために、長距離を歩いて募金を呼びかける「ウォーカソン」に取り組んでいます。

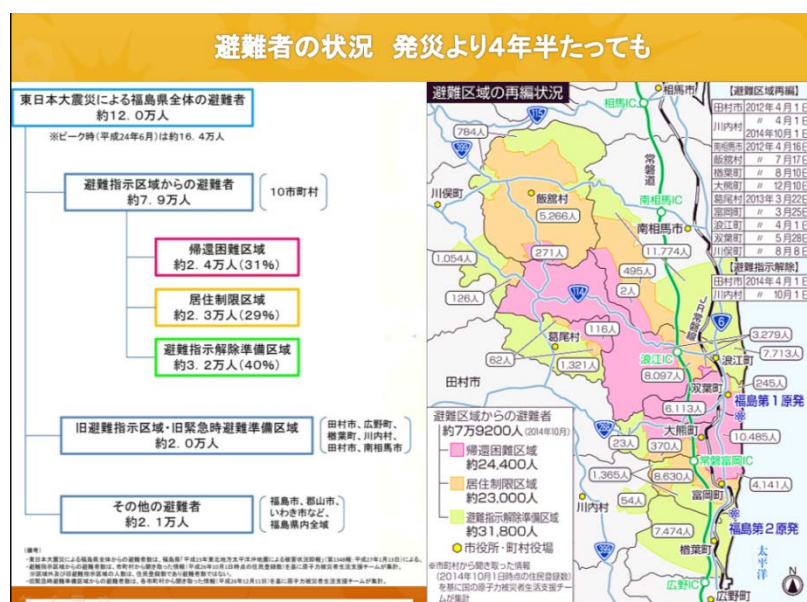
今回、福島の現状について学ぶことに焦点をあて、クリスマス前にウォーカソンを行い、その結果をクリスマス行事に生かそうとしています。その一環として、11月13日、「福島の実現 複雑化した現状をどう伝えるか？」と題して、日本カトリック司教協議会復興支援室の濱口一則氏が、同校で講演を行い、講話を聞いた生徒の感想が届きましたので、ご紹介します。

◆「ウォーカソン」…歩く(Walk)と、マラソン(Marathon)を組み合わせた言葉。参加者は、事前に募金目的を告げて「スポンサー」を募り、スポンサーには、歩く距離1kmについていくらかの募金をすることを約束してもらう。参加者は決められた日、決められたコースを歩き、歩いた距離に応じて約束した金額をスポンサーからもらうという募金活動のこと。このような仕組みから、参加者は、募金をするだけでなく、援助の必要な方々、援助の活動をしている方々、募金に応じて下さる方々と自分なりに愛の小さな努力を共にする。(京都暁星高校 HP 参照)

【講話感想】

・震災があって1年や2年の間は、ニュース等の報道で東北の様子を見ることができていましたが、最近では東北で起きた震災にふれるような内容のものはあまり見かけず、だいぶ復興しているのかと思っていました。しかし、今回の講話を聞き、4年半も経っているのに仮設住宅に住んで、放射能汚染でもう一生故郷に戻ることができない人がたくさんおられ、被災されてまだ見つからない人もたくさんいることや、まだまだ問題が解決されていないことが分かりました。

・自分の知らないところで多くの方が今もまだ苦しんでいることを知りました。復興しようと産業を興しても風評被害でダメになってしまうという苦労が見え、自分たちがしているウォーカソンももっと寄付金を集めて協力しないといけないと感じました。



不安・苦悩＝分断

- 国内に引かれた分断：「フクシマ」
- 県内に引かれた分断：3.0km、2.0km、1.0km
福島県民の分断→浜通りだけが被災地か
「自主避難者」には支援なし：勝手に逃げた人？
- 保証のあるなしで地域が分断
帰還困難地域→
居住制限地域→
避難指示解除準備区域
- 家族内の分断：高齢者と若い世代

原子力「平和」利用→発電 「トイレのないマンション」

- 東北地方は原子力発電のバイオニア？→若狭地域も原発街道！東北だけの問題ではない！
- 「安全」といい続けてきた「安全神話」の崩壊
- 被害は現在も進行中 Not Under Control!
- 国策であったにも関わらず東電だけの責任か！
→戻るかどうかは個人の判断に：いかにも自由選択に任せるかのような言い方
- 都市部の住民や産業のための電気を作るため、田舎に危険を押し付ける？

・直接会って話すことと物質的支援をすることは、同じことのように見えても、感じ取る側からすれば大きな違いがあるということが分かってよかったです。今の福島の人たちが望むものは、物資ではなく、福島の被災があったことを忘れないでほしいということだと思います。また、私たちが今できることは、福島だけではなく、東北の現状や問題をもっと詳しく知り、考え、被災された方々への理解を深め、そして、3・11を忘れないということだとわかりました。

・家を建てたら、除染をしたから復興したというものではなく、4年半が経った今でも心のケアが必要で、複雑な気持ちなんだということ、今回のお話で再確認することができました。国は、自分たちの責任ではないと謝罪せず、除染したから後は福島の人たちで考えてやってくださいというのは、おかしいと思います。多くのことを長い間秘密にし続け、福島やその周辺の人たちの人生や大切なものを奪っていたことは、決してしてはいけないことです。

・改めて福島の3・11について深く考える良い時間となりました。一番心に残ったのは、今でも続いているいろいろなところでの分断についてです。国という大きな中での分断から、家族という一番小さい中での分断など、原発事故が色々なものをばらばらにし、住民に多くの悲しみと苦しみを与えているという話を聞いてすごく悲しくなりました。また、震災関連死として、高齢者の自殺が多いということも衝撃でした。一番支えとなるはずの家族さえバラバラになってしまうなんて、原発事故は体だけではなく心にも数えきれないダメージを与えているのだと感じました。自分が今できることは限られているかもしれませんが、福島や被災地のことを忘れず考え続けていくことが大切だと改めて思いました。そして、今まだ苦しんでいる人が、一日でも早く幸せになれるようウォーカソンを頑張りたいと思いました。

・福島の問題について、「誰の責任なのか」という質問の答えとして「私の問題だとも思っている」という言葉が、一番心に残りました。てっきり政府の問題だろうと言われており、私自身そうとしか考えたことがありませんでした。その理由を言われた時、これまでとは違う角度からの考えが自分の中に入ってきて、ハッとさせられました。

福島事故が起こるまで、原子力がそれほど問題だと思っておらず、原子力の存在さえあまり理解していませんでした。事故が起きてからもよくわからないことだらけで、ただ福島は危ないという考えが自分の中で染みついただけでした。なんとなくの気持ちで頭の片隅で「福島は危ない」と思い、福島の方々を苦しめていたということがこの講話で分かり、良かったと思います。

パープルリボンサポーター養成講座 開催

NPO 法人カリタス釜石 互野 厚子

・自分のこととして考えなければならないと思いつつ、どこか違う世界の話であるかのように震災という出来事を捉えていました。しかし、現地の人の心境や、何が“今”問題となっているかのお話を聞き、本当に今、日本で起こっていることなのかと耳を疑いそうになりました。そして、福島を正しく知ることが大切だと思いました。

・福島の状況は、私の想像以上に悪く、原発事故の影響で、同じ地域や県内の人同士がいがみ合い、コミュニティの分断が起こり、そこからまた差別につながっていることに驚きました。補償金の問題でいがみ合ったり、果ては家族の中でさえ分裂が生じているということを考えたことがなく、とても平和とは言えない状況だと思いました。そして、人間の弱さを感じさせられました。

・「フクシマ」の文字を今までに何度も目にし、なんとなく冷たさを感じてはいましたが、そう表記する意味について特に考えたことがありませんでした。しかし、今回の講話を聞いて、「フクシマ」をそのまま受け入れることが、偏見を生み出すきっかけになるのかもしれないと考えると、実際被害にあっている方に本当に申し訳なく、そして大切な故郷の名前が不幸の象徴となることは本当に嫌なことだと改めて思いました。

・政府や私たち他県の人たちが被災者の人たちを苦しめている一つの原因だったのだと講演を聞いて感じました。私も無意識のうちに福島の人たちを差別していたのだと考えさせられました。政府はもう問題ないと事実を隠したり、口だけの計画で表面上でしか福島の人々をいたわっていないと分かり、本当の苦しみに耳を傾けて、私たちは行動していかなければならないと思いました。

・原発が与える害は、放射能だけではなく、精神や仲間関係の破壊、自殺に追い込まれることも含まれると知りました。政府や東京電力に責任があると考えていましたが、もちろんそこに責任はあるにしても、自分にも責任があるとは考えていませんでした。決して責任が自分にはないと言えないことを知りました。

・プルトニウムという放射能物質が、無害な物質になるまで15,000年もの時間がかかると聞いて驚きました。その年数に驚いたと同時に、そのような危険な物を自分たちが電気を使う、楽にスムーズに生活するために使っていたのかと言うことにも驚きました。4年半の月日が経過したけれど、状況はよくはなっていない今、原発のこと、福島のことをもっと知らないといけないと思いました。

・沖縄の基地問題について修学旅行に向けて学習していく中で「政府は一体何をしているんだ？」と思うことがたくさんありましたが、東日本大震災で事故を起こしてしまった福島の原発のことに関しても同じ気持ちを抱きました。利益になることを考えて行動するのではなく、人の気持ちに寄り添った政策をしてほしいと思いました。

・「私たちが忘れないこと」そして「忘れない気持ちを形にすることが大切」だということを講話から学びました。戦争でも、長崎・広島でも後世に伝えていくことが厳しい状況にあるのが現実です。だからこそ、このことを私たちが記憶し、今も辛い思いをしている人たちがいるということを思い、動いていかなければならないと思いました。

11月18日。釜石市、母と子の虹の架け橋、カリタス釜石が共催し、「パープルリボンサポーター養成講座」を、大渡町にある市保健福祉センターで開催しました。

1994年、アメリカで始まった「女性に対する暴力をなくす運動」は、毎年11月12日から25日までの期間、パープルリボンをシンボルとして開催されています。このリボンを身につけることは、さりげない支援や賛同の意志を示すことになります。

昨年に引き続き、生きづらさや悩みを抱えた女性を支援する人材の育成を目的とした養成講座は、女性を支える活動に直接現場で携わっている専門家3人を講師に迎え、民生児童委員や保護司など、男性も含む約30人が参加して、知識と理解を深めました。

岩手看護短期大学助産学専攻講師の西里真澄さんは、病院勤務を経て、保健指導を中心に母子保健活動に従事し、母と子に関する相談事業など、子育て・子育ての支援を続けています。「いのちを語る、いのちを伝える～地域の実態から生と性を考える～」と題し、講話しました。男女間における暴力についての相談件数は右肩上がりとし、自己肯定感が低い子どもたちについて、思春期の性と生、命の大切さを説き、子どもをケアする源は、家族の温かいサポートと周囲からのケアを受けることで満ちあふれる母親のエネルギーである。母親も「なりたい自分」を意識することが重要。愛の無い世界には命が芽生えても育つことはできない。「愛の反対は無関心である」と説いたマザー・テレサを紹介され、誰もが輝き、生きやすい社会であるために母と子の「生きる」を支えることが重要となると話し、自身も思春期の子どもを持っていることでの気づき、そして喜びを語ってくれました。



NPO 法人全国シェルターネット事務局の佐藤香さんは、「暴力(DV)被害者回復への道のり～シェルターでの日々～」と題し、シェルター全国ネットワークについて、DV被害、性暴力被害、デートDV、ストーカー被害、それぞれの実態について紹介しました。そして、子どもが受けるさまざまな影響と、そこからのトラウマ反応を詳しく説き、それらを正しく理解し、早期発見・適切な初期対応が被害者の回復が順調に進むことが多いこと。そして、同行支援の必要性、関係機関との連携協力的重要性、聴き取る力、つなぐ力、心をきちんと聴けるか、魂で聴き取ることができるかが、支援者として大事なカギとなると熱く語りました。

NPO 法人BOND プロジェクト代表の橘ジュンさんは、夜間東京の繁華街を歩き、行き場のない少女たちへの声がけや、メール、ウェブサイトで少女たちを中心に3000人以上の声を聞き、伝え続け、そして複雑な状況にも対応して「自分の存在が透明だと感じている」声を出せない子に、少しでもその「声」を出せる場所をつくって、少しでも楽になってほしい。自分のペースでありのままの自分を表現できるように。という活動理念を紹介しました。そして、同行支援・保護も含めた相談件数を示し、女の子が孤立することへの理解と、夜の町で出会った子への関わり、また夜の街には行かない子にはどのような関わりを行っているかを紹介し、ここでその子自身のSOS(生きづらさ)に気付くと共に、相談できなかった少女たちを理解することの重要性、そして女の子の葛藤にチームとして寄り添い、受け止めて、時にはこちらの気持ちも伝えて、時には待って、その子自身が「こうしたい」「こうしよう」と思えるようになるまで、その時、その時の気持ちに寄り添う後押しをしなければならぬと結びました。

福島の声 私たちは4重苦！

- 地震の被害
- 沿岸部は津波で全てが失われ
- 放射能汚染で自分の家に戻れず
- 「風評被害」で仕事もできず

「風評被害」は正しい情報がないために
偏見が生まれ被害をもたらすこと

問題の複雑化

- ・つながりの分断→差別
- ・お金で解決するしかない限界。
- ・どの立場の人も我慢の限界を感じている。
- ・子供は全てを見ています。
- ・原発の問題は都市と地方の問題。沖縄の基地地の問題と同じ。
- ・1次産業の衰退がもたらすもの(農業、漁業、林業、林業)

最後のトークタイムは、全員が円座になり、一人一人順番に感想や質問をし、大変盛り上がりました。

支援者として、現状を把握し、正しい理解と認識を持ち、よく聴き、きちんと寄り添うということが、3講師の共通項でした。

当日は快晴で、会場である9階の窓からは、遠くに光る海が輝いていました。今回の養成講座は昨年に引き続き、実りの多い内容として多方面に発信でき、カリタス釜石の日頃の活躍の賜物と自負しております。



Caritas Morning CAFÉ ～ママ憩いのほっと Space～

仙台教区サポートセンター 長島 明子

仙台教区サポートセンターでは、子ども支援活動の一環として、今年4月から福島県南相馬市のCTVC カリタス原町ベースの協力を得て、母子サロン「Caritas Morning CAFÉ」を開催しております。

カトリック原町教会のお隣「さゆり幼稚園」のお母様方を対象に、毎月2回、朝、お子さんを幼稚園に送った後の時間から正午近くまでの時間、お母さん方のくつろぎスペースとして原町ベースを開放し、開催しています。

乳幼児をお連れのお母さん方にもお越しいただけるよう、赤ちゃんの抱っこボランティアとして、子育て経験のある原町ベースの女性ボランティアさんにお手伝いいただいたり、保育士、幼稚園教諭の資格を持ったシスター方、看護師の資格を持った原町ベースのスタッフさん等、充実したメンバーでお迎えします。

ご利用くださるお母さん方は、いつも外で井戸端会議をされていらっしゃるグループの方や、お友達を連れてお越しになる方、赤ちゃんを連れて来られる方などで賑やかです。シスターの手作りケーキとハーブティも好評で、美味しくいただきながら、子育ての「あるある」や、育児の悩み事をお話されたりしています。「こちらで子どもを産んだり子育てするのに周りから色々心配されたけど、もう3人も産んでいるわ。」「私も生後6ヶ月になる双子が生まれて、もう子ども4人よ。」など、話が飛び交い、お母さん方の強さに圧倒されることもあります。



また、サロンでは、アロマハンドトリートメントのブースを設け、ゆっくりくつろいでいただき、時には思い思いのことをお話する時間としてもご利用いただいています。ハンドトリートメントを受けながら、日頃のストレスをお話になったり、また、震災の津波でご両親やご親戚を亡くされた時のお話をされる方など、今まで他の方の前では話せなかったことをお話されていけます。色々な方のお話を聴いていると、本当に「母は強い」と感じ、また、その反面やりきれない辛いお気持ちもたくさんあるのだと思いました。お母さんは一家の中

心人物、家族の心の安らぎ、お母さんの笑顔が子どもの健やかさを育んでいくことにつながるのだと感じました。

最近のサロンでは、ちょっとしたクラフトワークも行っています。12月はクリスマスシーズンも近いことから、マカロニでつくるクリスマスリース作りを行いました。クラフトワークを行うと、新たに利用してくださる方もおり、また違った雰囲気のお会になります。誰でも簡単に作れ、小さなお子さんでも参加でき、また赤ちゃんを抱えたお母さんもこの時はスタッフに預け、おしゃべりしながら、和気あいあいと作業に没頭されておりました。

出来栄は、写真の通り。皆さん自分でも良くてきたとご満悦、達成感とで満面の笑顔で喜んでいらっしゃいました。次回はアロマキャンドル作りを予定しています。これからも、お母さんが満面の笑顔になれることを色々提供できたらと思います。



主のご降誕のお喜びを申し上げます

この一年間、皆様には、大変お世話になりました。ありがとうございます。

2015年最後のニューズレター77号をお届けいたします。各ベースの支援活動も、皆さまのおかげで、今年も活動を続けていくことができました。

大震災から5年目を迎える2016年、新たな気持ちで、被災を受けた方々の心に寄り添いたいと思っています。新しい年も、皆さまの上に、主の豊かな恵みが注がれますようにお祈りいたしております。

仙台教区サポートセンター 一同



クリスマスの温かさ、聖家族のやさしさがよく表されているこのクリスマスのカットは、大船渡ベーススタッフ齊藤成実さんが描いてくださいました。齊藤さん、素敵なカットをありがとうございました。